
「阿闍世コンプレックス」再考

本間 毅

新潟市 退院支援研究会

(taiinshien@ozzio.jp HP:<http://tsk2017.com/>)

【はじめに】

学派によって呼称や境界は異なると思いますが、例えばユングが唱えた「意識」と「無意識」、その「無意識」の構成要素である「集合的無意識」と「個人的無意識」、「外交的」あるいは「内向的」という心の態度、「思考・感覚・感情・直感」という心のタイプ論¹⁾など、心の静的な構造と動的な機能の仕方だけでなく、「理解」と「心や気持ちの受け入れ（受容、腑に落ちる）」の違いなどの基本的な知識^{2) 3)}を整理しておくことは、クライアントや仲間の葛藤を理解する時に役立つと私は考えます。

対人援助学マガジン第43号で述べたように、クライアントの心の動揺に耳を傾けていると「心配」のように聞こえる「不安」やその逆も少なくありません。そして、「老いや死」ですらもない、文字通り「漠然とした不安」を「特定の臓器（関節）に関する心配」と誤解していることに気付いていない医療者により、大変な事態が引き起こされることがあります。医療者自身が、何よりも患者さんの回復とご家族の心の安寧を願った結果が、よくて受療の自己中止か喧嘩別れ、下手をすると医療過誤に至ることも珍しいことではないのです。

その後の方向性を示さずに、期日が来たからと退院を迫るようなことがあってはならない。そして効率だけでなく、クライアントが家庭と社会に参加することを喜んでくれる退院支援を目指したい。そのためには、共感的な理解の先にある、根拠が希薄かも知れないが、おそらく相手のためになるだろうという確信に近い「心を妄想する力」が必要になることがあります。まあ、「熱意」は「押しつけ」と表裏一体であるという自戒が前提になりますが。

普段は、意識と無意識の狭間にただよい、現実の言動に影響を及ぼす、さまざまな心理的要素が複雑に絡み合った観念の複合体「コンプレックス」の中でも、「それとは知らずに父を殺し、母と結ばれた後で全てを知り、悲嘆のあげく両目を傷つけ放浪の旅にでる息子」という、ギリシャ神話の『エディプス』の物語に題材を得た、フロイトの「エディプス・コンプレックス」は広く知られています。私はこれまで、親と子のアンビバレンス（同一

の対象に相反する感情を抱いた状態)により難渋していたクライアントの退院支援の糸口を、「エディプス・コンプレックス」と、これから述べる「阿闍世コンプレックス」に見出し、支援を進める上で頭とこころの整理がついたことが何度かあります。この経験を少しでも世の役に立てたいと考え、整形外科やリハビリテーション科のみならず、精神科、地域の医師会報等に何度か学术论文の体裁を整え投稿しましたが結果は全て「不採用」でした。唯一、精神分析家と思われる査読委員から「あなたの論旨が極めて稚拙であることはさておき、精神分析的な知見が如何にして退院支援の実践に有用であったか、そのアウトカムも明らかではない」というコメントをもらいました。確かに精神分析の素人である私の論旨が稚拙で飛躍しすぎていると指摘されるのは腑に落ちます。そして、昨今の「科学的な根拠に基づく医学」と、ギリシャ神話や仏教の経典や説話が相容れないだろうということも想定はしていました。でも、日頃は科学的根拠に基づく言動を心がけている人でも、例えば肉親の死のような、覆すことができない事象に直面した時、おのずと生ずる無力感と、この時ばかりは絶対的な存在に帰依したいと思う気持ちが生じることもあるでしょう。だからといって私は、特定の神話や宗派を擁護し合理的な科学性を否定しようとは考えていません。圧政や人種差別に基づく悲惨な事件が生じる度に、被害者を悼む集会を呼びかける宗教者がいます。しかし帰らぬ人はやはり帰りませんし、主催者の教義や宗派による集会に科学的なエビデンスがあるとも思えません。また、その悼みの集会によって引き起こされるムーブメントに統計学的な有意差を求めてもかいは無いでしょう。でも、そのような行動はしばしば個人と社会にとって価値ある変化をもたらすきっかけになります。「多死社会」と言われる現代だからこそ、医療・介護・福祉のフィールドに携わる人達の近代的で合理的な科学が、人々の宗教観や宗教心を価値のないものと否定し、人間の死がモノの減少や消滅のように認識されることがあってはならないと私は考えます。

【親と子のアンビバレンス】

病気や怪我のために入院した高齢の親の病状を医師に聞き、「私の親が病気になった理由はよく理解できたが、親自身の注意や努力も足りなかった」と応じ、病の最中にある親を叱咤する子がいます。また、いい年をした息子が病気や怪我をした途端に「待っていました」とばかりに、幼子をあやすような口調で息子の世話を焼き始め、お嫁さんに眉をひそめさせる母もいます。親、特に自らの腹を痛めた母と子の葛藤は、妊娠の遙か前、パートナーとの関係が成就した頃から始まり、実際に子を授かってからは、それ以前には思いもよらなかった感情が芽生え、時には子への攻撃や、第三者による攻撃の傍観という形すらとることがあります。子の側からも、自身の誕生の由来など、許しがたいエピソードを伝え聞けば、たとえそれが事実であっても聞き捨てならないと思ひ、親への怒りが燃え盛ることがあり、支援者が目の前で繰り広げられている「親と子の悲劇」を読み取る力量を養わないと、単なる「逸脱行動」と見做され、「ダメな親子」と決めつけられることすらあり

ます。

【エディプス・コンプレックス補足】

フロイトがギリシャ神話『エディプス』から着想を得た「エディプス・コンプレックス」を皆さんはよくご存知でしょう。私から少しだけ補足をさせていただきます。小林⁴⁾によれば、子供は成長とともに自分の中にある母親への性愛衝動を徐々に断念し、母を妻とする父親への嫉妬や憎しみを心の傷として自分の中に仕舞い込み、仕舞い込まれて自分でも意識できない原初の（3～6歳の男根期）ころの傷を負います。フロイトはこのころの傷を「エディプス・コンプレックス」と名付けました。この課程で、子は父親に攻撃（去勢）されることを恐怖し、愛憎半ばする父を一種の権威として取り入れ、同一化しながらモラルや倫理感（超自我）を形成します。ひと組の男女と、そのふたりから生まれる子供から成り立つ家族の中で、子供時代のリビドー（libido 性的な衝動）をいつまでも許容し続けることは望ましいことではありません。夫の愛を得て、妃の立場を保つために身籠もったヨーカスタが、夫ライオス王と共謀し死をもくろんだ子捨てを行なう時の、身を焦がすほど望んだ子を殺そうとするアンビバレンス（Ambivalence；相反する感情）。さらに「暴走する女性性（膣括約筋 vaginal sphincter）の象徴としてのスフィンクス（Sphinx）」の、解けぬものには死すらもたらす謎かけと退散、エディプスが「ふたつの目」をえぐり出す行為は去勢の象徴であり、神託をただのお告げとして聞き流すことができず、真実を知ろうとすればするほど悲劇に身を投じることになるエディプスの一連の行動は幼児期の外傷的体験をこれでもかと繰り返す「反復強迫」⁵⁾と解釈できます。フロイトは人間がこの心理複合（コンプレックス）を適切な時期に克服し、精算できるか否かが神経症発症の分水嶺になると考えました。

『エディプス』の作者ソフォクレスは、佐藤⁶⁾によれば『エディプス』の続編『コロノスのエディプス』の中で、老いたエディプスに明快な反撃の言葉を語らせました。即ち、「たった今、誰かがお前に近づいてお前を殺そうとしたときに、お前はその者に、自分の父親かどうか尋ねるか?」、「反対におれに対する加害者である父母は、おれを殺すつもりで足を貫き山中に捨てさせた。何もかも知っていて、おれを殺そうとした」、「おれは結婚に関しても、父親殺しに関しても罪人呼ばわりはさせない」と。私はさらに、夫の面影を残す息子と同年代の、息子とよく似た足の傷がある若者を新たな夫として迎えるヨーカスタの性愛衝動に些か疑問を感じます。

「〇〇コンプレックス」もそうですが、診断基準やガイドラインから自分に都合の良い解釈を選び出し、「この患者さんの疾病の原因はこれに違いない。だからこの家族にこう働きかければ病も治るし、家族関係は修復に向かい社会生活にも復帰できる」と医療者が判断することは、それが正鵠を射ていれば、結果として患者さんや家族にとって救いになる場合もあるでしょう。でもそのような稀有な場合でさえ、「ちょっと待って、私の場合はこ

の点が少し違うので気をつけて欲しい」というクライアントの声を聞き取れないと、致命的な過ちを犯しかねません。神々の神託が下される聖なる場所デルフォイには「汝自身を知れ」、「限度を超えるな」というふたつの格言が記されているそうです。神託はただのお告げにすぎません。そのお告げを聞き、よく吟味したうえで実行する際にも限度を超えないよう節度を守っていればエディプス親子の悲劇は起こらなかったでしょう。過去の私自身を振り返ってみても、節度をわきまえることが難しかったのは「追い詰められていた時」だったと思います。数多い人々の中で、不運にも病気や怪我という不条理にみまわれたクライアントは、例外なく追い詰められています。多くの神託を下す神アポロンは、「医術と道徳および光明」の象徴です。エディプスが神託によって両親から捨てられそなたしたのは、「酩酊と豊穡、集団の狂騒と暗黒」を象徴する神ディオニソスが祀られるキタイロンの山です。そして、エディプスを救ったのは弱きものを眼差す、父ライオスの名も無き従者と羊飼いであり、賢者コリントスのポリュボス王と妃メロペー夫妻でした。若き日の私がニーチェやショーペンハウアーから学んだことは、アポロンは理性の、ディオニソスは意志や情念の神で、ディオニソスは人（特に貧しきもの）の世の空しさを知りながら、葡萄の収穫という刹那の狂騒とやり場の無い酩酊をもたらすが、決してアポロンに劣るものではないということです。合理的なものだけではない、非合理的なものにも価値があると私が考えるようになった理由のひとつです。我々が良かれと思い提案したことが、「変更不能な神託」に変わりうる可能性を忘れずに支援の方策を練るべきです。

【阿閼世コンプレックス】

我が国における精神分析の草分けである古澤平作⁷⁾は、1931年（昭和6年）に自らの論文「罪悪意識の二種」を東北大学の機関紙『良稜』に掲載、翌1932年には留学先のウィーン精神分析研究所で出会ったフロイトに、「阿閼世コンプレックス」と言う副題をつけてこの論文の独訳を提出しました。その後、古澤の指導を受けた小此木啓吾は、父母と息子の三者関係を息子の側から論じるフロイトのエディプス・コンプレックスとは異なる、母親が子供を持つことの葛藤と、子供における未生怨(自分の出生の由来そのものに対して抱く怨み；小此木)という母と息子の二者関係に注目し、自己の成立に関する阿閼世コンプレックス論⁸⁾を発展させました。「阿閼世物語」いわゆる「王舎城の悲劇」は、浄土真宗の三大経典である『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』のひとつ『観無量寿経』⁹⁾で説かれる、「女人凡夫の往生」（功德を積んだ高貴な男性だけではなく、身分の低い庶民、特に女性でも極楽往生ができるという浄土信仰）の一節や釈迦晩年の説話の題材として扱われ、国宝の「当麻曼荼羅（奈良県当麻寺所有）」にも描かれています。

紀元前1500年頃に遊牧民であるアリア人がパンジャーブ地方に移住、トラヴィダ人はじめ先住の民を支配し、10を超える国家に分かれていた古代のインド地方は、紀元前600年頃にはコーサラ・ヴァンサ・アヴァンティ・マガダの4カ国に統合されました。そのマ

ガダ国で、釈迦入滅の少し前に阿闍世王とその両親に起こったのが「王舎城の悲劇」です。この悲劇は、後に親鸞の「悪人正機説」の主題にもなります。

『古代インドの摩伽陀国（マガダ国）王舎城の国王頻婆娑羅（ビンピサラ）の妃韋提希（イダイケ）は、容色の衰えとともに夫の愛が薄れ、世継ぎを産めずにいると妃の立場が危くなるのではという不安を抱き預言者に相談した。預言者は、森に住む仙人が三年後に亡くなり、イダイケの胎内に宿り世継ぎに生まれ変わると予言したが、妃イダイケは三年を待つことができずに仙人を殺した。仙人はいまわの際に「生まれ変わったら必ず国王ビンピサラを殺す」と呪いの言葉を残し、直後に妃は身籠もった。イダイケは日ごとに仙人の怨みを怖れるようになり、せっかく授かった王子阿闍世（アジャセ）を、王ビンピサラにも事情を打ち明けて、ともに高樓から産み落とした。しかし王子は小指を骨折しただけで無事に成長し、「指折れ（婆羅留枝バラルシ）」と仇名されるようになった。本来、「阿闍世」とは、「不生怨フジョウオン（恨みを買う敵が存在しないほど無敵の）」という、一国の王にふさわしい猛々しい男子になるように願いを込めてつけられた名前である。

16歳になったアジャセは、かねてから教団転覆を狙い、幻術を駆使してアジャセに取り入る釈迦の従兄弟でもある提婆達多（ダイバダッタ）から、自分の出生と名前の由来を「未生怨ミジョウオン（仙人を殺してまで生まれたアジャセは、父を殺す運命にあるため高樓から投げ落とされた。転じて、生まれる前からの親と、その親から生を受けた自分の成り立ちへの怨み）」と聞き、怒りに任せて父を幽閉した。それからしばらくして門番に確認したところ父は衰弱するどころか健康で、何故ならば母が体や衣に蜜を塗り装身具に果汁を入れて父に与えていたからと聞き、王子は怒りにまかせ父を殺した。母イダイケをも短剣で刺し殺そうとしたが、大臣耆婆（ギバ）と月光に「王位を奪うため父を殺す王子はあっても、母を殺すことは許されない」と懇ろに諫められ、アジャセは母の殺害を思いとどまる。イダイケから、父王ビンピサラがアジャセを溺愛していた逸話（化膿した指の膿を吸い出し飲み込んだ）を聞き、殺父と殺母未遂の罪悪感がつり、アジャセには誰も近づけない程の悪臭を放つ瘡が全身を覆う「流注（ルチュウ）」と言う皮膚病が生じた。「これは私の悪しき心がもともなる病である」と言う阿闍世のもとへ、他の大臣たちが連れてきた当時のインドを代表する賢者達（六師外道）は慇懃で外見も立派だが、アジャセが父を殺したことを是認し、王たるものの体裁だけを問題にするので、アジャセの苦悩はさらに深まった。さまざまな治療を試す母イダイケの努力の甲斐も無く、息子アジャセの病状は悪化する一方だった。だが、イダイケが自らの葛藤を釈迦に懺悔してからアジャセの皮膚病は徐々に快方に向かった。医師でもあるギバ大臣はアジャセが「慚愧の念（心の内に自らを恥ずかしく思い、他人に対しても恥じる心、人に羞じ、天に羞じる心）」を持っていたことは幸いではあるが、さらに釈迦に救いを求めるよう勧めた。天上からの亡き父の勧めの声もあり、釈迦を訪ねたアジャセは、「自分は悪臭を放

つ伊蘭樹（イランジュ；信心のない、卑しい樹木）のような卑しい存在にすぎない。でも、今はその伊蘭樹から香り立つ梅檀（センダン；信心が厚い、尊い樹木）が実ったような心境です」と言い、釈迦は「あなたの父ビンピサラに竹林精舎など寄進を受け、彼を国王と認めた自分たちにこそ国王の死に対する責任がある。そのためにあなたが地獄へ落ちるならば、自分たちも地獄へ落ちるであろう。」と諭した。かつては、「その性、弊悪にして殺戮を喜び、口に四悪を具し、貧・患・愚痴もて其のこころ熾盛たり」つまり懺悔せず悔悛することがない「一闍提」（イッセンダイ；悪事に際し謝罪や後悔など一切しない、阿弥陀仏ですら救いようがないもの）と言われたアジャセは、釈迦に帰依してから仏教最高の知恵「阿耨多羅三藐三菩提（アノクタラサンミヤクサンボダイ）」を得て名君とうたわれるようになり、マガダ国は大いに栄えた。』

【阿闍世コンプレックスのテーマ】

小此木¹⁰⁾が「阿闍世コンプレックス」のテーマとして挙げた三項目に私見を加え紹介します。以下、重要と思われる部位にアンダーラインを施します。

1. 「母親における子供を得たい願望と子殺しの願望の葛藤」

現代の女性に比べ、古代インド王族の妃ともなれば世継ぎを産むこと自体に個人の枠を超えた極めて重要な意味があることは想像に難くありません。また、終戦前後の日本のように、出産時の母子の死亡が国民の平均寿命を左右していた時代であれば、体力と気力が充実している「容色が衰える以前」の世代で子を持つことは、母子の健康に関わる大事な要件だったでしょう。ならば、そうして子を授かった母が全て幸せ一杯かという、必ずしもことは容易ではありません。今、この時期に子を産んで果たして生活が成り立つのだろうか、せつかく身につけた仕事を諦めざるをえないような事態に陥らないだろうか、逆に子を持つことで夫の気持ちが自分から離れないか、とさまざまな不安が母になる女性の心をよぎります。熱を出した孫を救急外来に連れてきた祖母が、娘さんやお嫁さんを「子供は熱を出すもの」と諭すことがあったとしても、子の発熱という経験を重ねる度に「いつものこと」と冷静になる母を私は見たことがありません。子のことでは取り乱すのが母の性なのでしょう。周囲からは育児にまつわるさまざまな情報が押し寄せ、若い女性が母になる前から「私は本当に母になっても大丈夫なのか」という気持ちになるのも当然です。そして殆どの男性パートナーや女性の父は、手をこまねいて見守る以外に手立てはありません。このような問題の解消を目指すフィンランドの「ネウボラ(neurola アドバイスをする場所)」は、妊娠の可能性のある若いカップルへのアドバイスに始まり、産後の育児ストレスの解消まで産科医療・保健と対人援助の高度なトレーニングを受けた保健師が活躍するシステムです。このような、妊産婦とその予備軍特有の物心両面の不安を払拭するため

のユニークな取り組みを紹介する高橋の著書¹¹⁾は、そのシステムで保健師(看護師)が果たす重要な役割の詳細と、オープン・ダイアログとの位置づけまで明らかにした名著です。

2. 「子供における未生怨と母親殺し(憎しみ)の願望」

自分はどこから来てどのように生まれたのかという、自己の成り立ちに関する根源的な問いかけは、母子分離の遙か以前から起こります。私が育った昭和中期の開業医院(有床診療所)という環境は、事業主である父とそれを支える看護師でもある母を中心に、兄や若い看護師達に囲まれた、時には患者さんやそのご家族が自宅にも侵入してくるゲメインシャフト(地縁・血縁でつながる集団)とゲゼルシャフト(機能体組織や利益共同体)が渾然一体となった、かまどや井戸が残る前近代的な空間でした。近くにいる男達(家族だけに限りません)が面白半分に、「子供はコウノトリが運んで来る」、「いや橋の下に捨てられていたのを拾ってきただけだから、あまり言うことを聞かないともう一度橋の下に置いてくる」などとからかうと、子供の疑問はさらに深まり、不安を呼び起こすことさえあります。偶然、目撃した自分の知らない両親の姿(結合両親像 combined parent figure)に対し、昭和30年・40年代に当地で行なわれていた「性教育」は、子供達を納得させる解答を与えませんでした。詳細や具体ではない、そのことが持つ意味を知らせることが教育の役割であるように私は思います。

『王舎城の悲劇』の中で、仙人が死の直前に放った言葉を怖れた母イダイケが高い塔からアジャセを産み落とすのを父ビンビサラが手伝ったと釈迦の従兄弟ダイバダッタから聞き、両親への憎悪の心をたぎらせたアジャセの怨みとともに、私はアジャセに幻術で取り入り教団転覆まで画策したダイバダッタの動機にも興味を憶えます。出家する前の釈迦の妃耶輸陀羅(ヤシュダラ)の婿取りを巡る、若き日の釈迦とダイバダッタの愛欲の争いが尾を引いていたという説もありますが、いずれにしても人が自己の成り立ちについて頭と心を悩ませるとき、悪しき意図の有無に関わらず、予想もしていなかった情報が耳に入ると、例えそれが、阿闍世出生時のエピソードのように事実であったとしても怨みの感情が発生することは十分に考えられます。その反応としてアジャセのように何かしらの行動に出るものもあれば、敢えて言動には出さず自分の殻に閉じこもるものも不思議ではありません。世間の評判が高い仕事熱心な父に関し、良妻賢母と呼ばれる母から子へ夫としての不満や怨みの言葉がタイミング悪く伝わると、思いもよらぬ悲劇が起こり得ます。仮に夫や子への褒め言葉や不平不満はほどほどにと母が心掛けていても、子の感受性が高ければ悲劇を呼ぶこともあるでしょう。

余談ですが、我々の時代は幾つかの例外的な研修施設を除き「当直明け」という概念はなく、研修医は無給にひとしい条件で週7日、15時間前後の勤務をすることも珍しくありませんでした。周囲からは、「大変だろうが、必ず自分の財産になるから体に気をつけて頑張らなさい」という励ましだけではなく、ダイバダッタのように、「お前の時給がいくらか考

えてみる。研修医ほど救いようのない仕事はないぞ」とささやく声も聞かれました。そのダイバダッタは、愚かではあるが頑張れる若さに嫉妬していたのかも知れません。医療・介護・福祉職のみならず、「心の闇」をもつと言われる若者に注目が集まる度、私は「言葉」で人は鬼にも仏にもなり得るという思いを新たにしています。

3. 「罪悪意識の二種」

古澤はフロイトに提出した論文「阿闍世コンプレックス」の副題を、「罪悪意識の二種」としました。その中で古澤は、つい皿を割ってしまった息子が親の前に引き出され、畏怖のためにおののき、再三「悪ウ御座いました」と詫びたときの意識が「ひとつめの罪悪意識」。それを咎める老爺を尻目に、「お前がしたことは確かに悪いが、人間は人間、皿は破損すべきもの、どうしたって仕方がない。今後を戒めて働くように。」と父に言われ、従順な子供はわっと泣き出したとする意識が「もうひとつの罪悪意識」です。古澤はこの感情を「親に許された子は、心をとろかされ」と表現しています。「懺悔」と書いて「さんげ」と読むときは処罰されても仕方がない「悪い事」を告白し、「さんげ」の時はもう一歩進んで「悪い事をしてしまったのに大目に見てもらい申し訳ない」と思う。つまり、「エディプス・コンプレックス」で神や父による処罰的意識を強調するフロイトに対し、古澤が「阿闍世コンプレックス」で示したのは母と父による東洋的、仏教的な許しです。横山¹²⁾は、この二つの物語の差は釈迦の存在にあるとし、「母の罪、子供の怨み、父を殺し母をも殺そうとした罪、それら全てを許す大いなる存在、全てを超えた超越的な力こそ心の病を癒すもので、自己治癒力として自己に内包されるものとして重視した。その力は死に限りなく近い、ぎりぎりの苦悩の中で初めて機能し始める」とも述べています。ユダヤ・キリスト教の一神論的な因果関係とは異なる、人間同士の間主観的な縁の中から生じる許しを、土居¹³⁾は「いけないことをしたのですまない」と端的に表現しましたが、フロイト自身は古澤が引用した論文「トーテムとタブー」の中で、父を殺した子達の中に生じた強迫自責と呼ぶ、「父を殺してすまなかった。今となって改めて父が偉大であることが分かったので、二度とこのようなタブーを犯してはならない」という感情について触れています。¹⁴⁾

フロイトは、とにかく勤勉で礼儀正しい古澤を高く評価し、「日本から来た古澤君に素敵な富士山の絵をもらった」と周囲に自慢していたそうです。でも、自分の論文の独訳を師に早速提出できるほどの語学力がある古澤が（語学力とコミュニケーション力は別物です）、留学先の街角に立った時、ふと孤独を感じたとしても不思議ではありません。そんな古澤は、熱心な浄土真宗の門徒で、その宗教観に基づく心理複合（コンプレックス）への自分の気づきをフロイトに認めてもらいたいという自己承認欲求があったのかも知れません。

【第43号で検討したMさん母子の関係を「阿闍世コンプレックス」と言う視点で見直す】

以下に、Mさんの経過に沿った検討を加えます。前号からの繰り返しをご容赦下さい。

お母さんの疲れを心配して、母でもある看護師が、「お母さんが倒れたらMさんが寂しがるので、その前に休みを取りましょう」と勧めても、お母さんは、「ありがとう。でも今さら言っても仕方がないけど、全ては（子供の異変に気付かなかった）私の責任だから」と応え、50年経ってもお母さんは強い自責の念にかられているようでした。「Mが熱を出して、N病院に連れて行ったときから私の時間は止まってしまったの」。Mさんのお母さんにとってお父さんやMさんのお兄さん達との時間は普通に流れても、Mさんとの時間の流れはあの時から完全に遮断され、再び動き出すことは無かったのでしょう。『王舎城の悲劇』の中で、息子アジャセに「流注」という悪臭を放つ瘡が生じ、いろいろな薬を試しても効果がみられず釈迦にアジャセ生誕の経緯を説明した妃イダイケも同じ心境だったかも知れません。その時、釈迦はイダイケに対しひと言も語らず、後に「無言の説法」と言われる時間が流れました。沈黙は、思考が狭窄し、罪悪感を呼び起こす記憶が繰り返し侵入する外傷性ストレス障害¹⁵⁾のクライアントに対し、少なくとも害にはならないアプローチです。

健康に育っていた乳児が髄膜炎のような感染症に罹患した責任をその母親に求めるのは、根拠がなく飛躍しすぎた考えです。でも、Mさんのお母さんに限らず、母は子の病気や怪我の医学的な説明を理解できても、心でそれを受け入れることができないことがよくあります。その後の水頭症の再発と再手術の大変さ、他のお子さん達より不自由な生活を過ごすMさんの姿は、お母さんにとって「思い出」には昇華できない、塗り替え不能な「外傷性の記憶」¹⁶⁾であり、「生き残ったものの罪悪感」¹⁷⁾とも考えられます。

実は、緊急性はあるが治療のリスクも高かった症例で、リハビリテーションが始まる頃になって「最初の医師の説明など、全く分からないうちに治療が始まった」と言う患者さんや家族は少なくありません。釈迦は、相手の能力（機根）や性格に応じ、その場にふさわしいやり方を選び説法をした（対機説法）ことが知られていますが、医療選択に必要な説明をする場合でも、緊急性が高いときほど対機対応を心掛けるべきでしょう。「手術を受けないともっと大変なことになると言われて、それで何度も手術を受けました。手術はうまくいったと言われて安心できたのは有り難いのですが、結局は良くならなかったです。手術がうまくゆくの、Mが良くなるのは別なことなのでしょうか」。そんなお母さんとお兄さん達の言葉と、アジャセの逸話を照らし合わせると、私を含む医療者が「殺父と殺母未遂」に悩み苦しむアジャセに、道理を諭すだけの「六師外道」にすぎなかったような気がします。そして、ふたりのお兄さん達こそがイダイケとアジャセを正しく導く大臣「耆婆」と「月光」だったのでは、と思います。医師でもあるギバ大臣は、アジャセが「慚愧の念」を持っていたことが幸いであったと言いましたが、Mさん自身は自分の気持ちを言葉にすることはできず、「阿闍世コンプレックス」として、アジャセの心を投影した私が見解が正しかったのかご本人には確かめようがありません。でも、日々を樂しげに過ごしていたMさんは、子供の頃から双葉より芳しい「梅檀（信心が厚い、尊い樹木）」の志で、ご家族や療育スタッフ達と接していたことは確かです。そして Mさんを看取ることを決意した

ときに、お母さんは心の内なる仏から真の許しを得たのだとも思います。

最後に、仮に例え雨や大雪が降ろうが脳外科に 50 年間受診し続け、頭部や肺の CT を定期的に撮影し、細菌検査の結果に合わせた抗生物質の投与を行っていたら M さんは長生きできたかと言えば、けしてそんなことはなかっただろうというのが私の見解です。人間は、病気は無くとも体を壊すと言うことがあるのです。古澤平作はクライアントの自己洞察が深まる度に「貴方は仏になった」と大いに賞賛し、治療が終了すると自宅の夕食に招くこともあったと言われています。私には到底、真似ができないことですが、改めて医療は誰のためにあるのか考えさせられる逸話だとも思います。

【参考文献】

1. 河合隼雄：『ユング心理学入門』。培風館, PP95-101, 274-300, 2011年
2. フランク・ゴブル（小口忠彦訳）：『第3勢力 マーズローの心理学』。産業能率大学出版部, PP59-85, 2011年
3. 鈴木大拙：『仏教の大意 第二講 大悲』。法蔵館, PP87-93, 2009年
4. 小林敏明：『フロイト講義〈死の欲動〉を読む』。せりか書房, PP107-115, 2012年
5. 川谷大治：「道徳の衣を着たマゾヒズム マゾヒズムの経済的問題。『現代フロイト読本2』」。みすず書房, PP546-566, 2008年
6. 佐藤紀子：「阿闍世から〈コロノスのエディプス〉へ『阿闍世コンプレックス』（小此木啓吾, 北山修編）」。創元社, PP348-365, 2005年
7. 古澤平作：「訳者あとがき」『S. フロイト 続・精神分析入門』。日本教文社, 1953年
8. 小此木啓吾：『日本人の阿闍世コンプレックス』。中公文庫, PP61-77, 1981年
9. 中村元ほか：『観無量寿経・阿弥陀経。「浄土三部経」』。岩波文庫, PP43-50, 2013年
10. 小此木啓吾：「阿闍世コンプレックス論の展開『阿闍世コンプレックス』」。創元社, PP8-14, 2005年
11. 高橋睦子：『ネウボラ フィンランドの出産・子育て支援』。かもがわ出版, 2015年
12. 横山博：「母性原理と阿闍世コンプレックス『阿闍世コンプレックス』」。創元社, PP270-285, 2005年
13. 土居健郎：『甘えの構造』。弘文社, PP74-87, 2013年
14. 門田一法：「トーテムとタブー フロイトの文化論を読む『現代フロイト読本（西園昌久監修, 北山修編集）』」。みすず書房, PP273-290, 2009年
15. ハーマン, J, H. : 「恐怖・侵入 『心的外傷と回復（中井久夫訳）』」。みすず書房, PP52-61, 2013年
16. 同上：「新しい診断名を提案する・新概念が必要になった」。みすず書房, PP186-191, 2013年
17. 中井久夫：『徴候・記憶・外傷』。みすず書房, PP95-97, 2011年